

Be creative !



東日本大震災 追悼

今年度は諸々の取り組みや日にちの巡りの関係もあり、東日本大震災追悼の全校放送をする日時がとれません。10年間続いてきた取り組みゆえとても残念ですが、「忘れないこと」が私たちにとって最も大事なことであります。来年の3月11日を心から待ちましょう。今年度は「校長室だより特別春号」を通して、私の思いを皆さんに伝えます。一人ひとりの生徒の皆さんが、それぞれの心の中で、この震災で犠牲になられた皆さんへ哀悼の意を捧げてください。

先週のGFS Iの授業では1年生の皆さんが「ブックトーク」に取り組みました。昨年と同じころに2年生の皆さんも同様のことに取り組みましたね。16人の代表の皆さんは、1冊のお薦めの本の魅力をとて上手に私たちに伝えてくれ、参加させていただいた私も深い感銘を受けました。皆さんの取り組みに倣い、今日は私も「ブックトーク」に取り組んでみようと思います。

私が皆さんにお薦めする作品は『想像ラジオ』作者はいとうせいこう氏です。本の帯にはこう記しましょう。

耳を澄ます。深夜2時46分、そのラジオは始まる

「想—像—ラジオ—」このジングルで放送は開始される。DJは赤いヤッケを着た「アーク」こと芥川冬助。彼はなぜか高い杉の木にひっかかり、あおむけになり、片手に携帯をもったまま、この放送を送る。多くのリスナーの声を聴きながら、彼は自分の来し方を振り返り、行く末をぼんやりと理解していく。彼にはどうしても聴きたい声があった。でも、聴けない。リスナーは彼に伝える。「その声があなたに届かないとすれば、それはあなたにとって幸せなことなんじゃないのかな…」意識が霞んでいく中、彼はその声を求めて耳を澄ます。リスナーも私たち読者も耳を澄ます。沈黙に耳を澄ます……。

映画の予告編の如く、私の紹介もここで終わります。アークの父と兄が彼を訪ねてくる場面を紹介します。

「冬助」 え？ 「ほれ、冬よ」 はい。

「おらだ、父ちゃんだつうの」 あ。「洗礼名にパピペポのついた浩一だぞ」 兄貴も。

「おめえがべらべら家のごどしゃべっから、オヤジも肩身がせまくなっぺしよ。」

ああ、ごめん。また来てくれたのか。だけど、つつい口をすべらせちゃうのがこの番組の人気の秘訣らしいから。あはは。

「冗談はもういいがらよ。浩一も言ってけどよ、ラジオなんがやめろ、冬。木の上であおむけになっていねで降りてこ。おめえの顔がどんな風だがも、下のおらだちには見えねえんだぞ。ほれ、俺ど浩一ど三人で家さ帰っぺ。」うん、そうしたい気持ちもやまやまだよ。俺だって父ちゃんと兄貴の姿が見たい。声が下の方から聴こえるだけってのは不安というか寂しいというか、幻覚みたいでリアルじゃない。

「冬助、縁起でもねえごどだべ。死んだ蛇が巻きついた杉の木の上で、おめえはじっと動がねえ。鳥が一羽、おめえを見てる。ほだらおがしなごどで何がラジオだ。DJだ」

でも、美里が見つからないんだよ。連絡を呼びかけている最中なんだ。父ちゃんたちにはわかんないだろうけど、この放送、リスナーの数が半端じゃない。たぶん何万人って単位で聴かれているよ。ま、その数もリスナーからのメール読んで知ったんだけど、一秒ごとに増えていっているだろうって。いまや、俺の放送がたくさんの人につながるほとんど唯一の場になってるんだってよ。だから俺にも責任ってもんがあるし、第一この番組以上に強力な美里との連絡手段はないんだ。

「おめえを見捨てるわけにはいがねえって、オヤジ、足すっかり悪いのに道もねえ中をのろのろ歩いて来てるんだ。冬助、それを忘れんなよ。次来た時は黙って木を降りろ」

わかった。来てくれてありがとう、父ちゃん、兄貴。あ、兄貴。出来たら蛇、はがしてってくれないかな？

「馬鹿たれ」